



唐末宋初の熾盛光仏図における他図像の借用について

施, 園園

(Citation)

美術史論集, 24:135-147

(Issue Date)

2024-02-17

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493544>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493544>



唐末宋初の熾盛光仏図における他図像の借用について

《キーワード》唐末宋初 熾盛光仏 星宿神

施 園 園

はじめに

熾盛光仏信仰、及び熾盛光仏を主題とする絵画や彫刻作品は中国の晩唐期（九世紀）以降に登場し、長い間流行していた。熾盛光仏は毛穴から五色の大光明を放つことからこの名が付けられ、日月と星宿などの天体を司る仏である。この時代において、地上の災厄や人の運命などはすべて天体の運行に関連付けられている。天体運行の異変が起きた時、地上ではそれ相応の影響を受け、災いが降りかかり、人々が不幸に取りつかれることになると考えられている。その際に、熾盛光仏はその大光明を放つことによって、天地異変をおさめ、災厄を取り除き、人々を不幸な境遇から救い出してきた。

熾盛光仏を説く經典儀軌は、唐代の不空が訳した『仏説熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經』¹⁾、唐代訳者不明の『仏説大威德金輪仏頂熾盛光如来消除一切災難陀羅尼經』²⁾、唐代の達磨栖那が訳した『大妙金剛甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經』³⁾、唐代の尸羅跋陀羅が訳した『大聖妙吉祥菩薩說除災教令法輪』⁴⁾などがある。これらの經典儀軌に従

い、熾盛光仏を本尊とする修法が盛んに行われてきた。

古代中国の仏画は、主に寺の壁画という形式で存在しているため、戦争や地質災害などの影響で多くが破壊され、宋以前に描かれた寺の壁画の遺例はほとんど残っていない。しかし、『宣和画譜』『益州名画録』『图画見聞志』などの文献によると、星宿を主題として制作された絵画は決して少なくないことが窺える。中国では唐末及び宋元明時代における熾盛光仏図像の作例がいくつか現存している。

孟嗣徽氏の指摘により、⁵⁾これらの現存作例には、大英博物館所蔵の「熾盛光仏並五星図」（以下、大英本と表記する）（図1）を代表とする、主尊の熾盛光仏が牛車に乗って、斜め向きの姿で描かれ、星宿たちに囲まれた「巡行式」と、大足石刻・北山仏湾の第三十九窟にある「金輪熾盛光仏及び九曜像」（以下、大足像と表記する）（図2）をはじめとする主尊が九曜に囲まれ、蓮華座の上に結跏趺坐している「正面式」がある。また明時代になると、主尊の両側に脇侍菩薩と諸星宿が横に並ぶ「三尊式」が流行していた。

ただし、宋初までに制作された現存する七幅の熾盛光仏図像の作

例から見ると、「巡行式」と「正面式」に分類されたこれらの作例は明らかに違う底本からのものである。その中でも「熾盛光仏並五星図」、大足石刻・北山仏湾の第三十九窟にある「金輪熾盛光仏及び九曜像」、奈良・上之坊所蔵『熾盛光仏大威徳銷災吉祥陀羅尼經』見返絵と蘇州博物館所蔵『大随求陀羅尼經呪』版画は制作年代が明確な作例である。本稿では主にこれらの制作年の明らかた作品を、基準作として取り扱う。まずは画面分析を行い、五星図様が表す多くの類似点と、主尊である熾盛光仏の持物、印相、それらを取り巻くモチーフに統一性がないことを明らかにし、五星図様の発展と主尊熾盛光仏のそれが同調していないことも確認する。また、先行研究を踏まえた上で、經典儀軌の内容及びその流布や熾盛光法が修法される背景を考察し、この時期における熾盛光仏図が上述の特質が際立つ原因を明らかにする。

唐末宋初の熾盛光仏図の図像分析について

宋初までに制作された熾盛光仏図像のうち、現在まで伝えられている作品は七幅あり、その中で年紀があるのは四幅である。孟氏の分類によると、これらの作例は「巡行式」と「正面式」に属する。画面を細かく確認していくと、各図に独自性がある。以下では、制作年代順に紀年銘を有する四つの熾盛光仏図に対し画面分析を行う。

(一) 大英本について

まずは「巡行式」に属す最も古い現存作例である大英博物館所蔵の「熾盛光仏及び五星図」を取り上げ、その基本情報を確認する。大英本は制作年代と画題が供養銘の中に明確に記されている貴重な作例であり、熾盛光仏と星宿を主題とする唐時代に残された唯一の遺例である。

画面の左上に以下のような供養銘が書かれている。

「熾盛光仏並五星

表慶神乾寧四年正月八日

弟子張淮興畫

記」

供養銘からわかるように本作の題名は「熾盛光仏並五星」図で、制作年は唐の乾寧四年（八九七）である。絹本着色で、出土場所は敦煌莫高窟の第十七窟である。

熾盛光仏は画面の中央に位置し、牛車に載せられている蓮華座の上に、結跏趺坐の姿勢で坐っている。右手は屈臂し掌を前にして第二、三指を伸ばし、左手は腹前で掌を上にして五指を伸ばし、説法印を結んでいる。体は画面の左側に傾いている。螺髪で装飾がない質素な姿の如來形である。熾盛光仏の肉身は墨線で描かれ、頭光と身光がないが、体から五色の大光明を放っている。牛車の両側にはそれぞれ一本の、雲の文様で飾られた幡が掲げられている。熾盛光仏の頭上には天蓋が懸けられている。体の前には香案が設けられ、

その上には様々な供養品が並べられている。

ウィット・フィールド氏は、熾盛光仏の目や鼻などの線も描き直され、他の像よりもずっと濃くなり、表現も新しくなっていることより、主尊の顔にある金泥が塗り直されたことを指摘している。⁽⁶⁾

熾盛光仏と五星は一团として雲の上で運行する様を呈している。

五星の持物、頭冠及び色に関しては、『七曜攘災決』⁽⁷⁾卷二、『梵天火羅九曜』⁽⁸⁾卷三など九世紀に唐の都に伝来した經典が典拠であることが指摘された。

熾盛光仏の右手側に水星がおり、婦人の姿で、黒衣を纏い、頭に猿の冠を戴き、手には筆と紙を持っている。水星の右手には、官人の姿で、青衣を身に着け、猪の冠を戴き、花と果物を捧げている木星が描かれている。画面の左下にいるのは土星であり、婆羅門の姿で、牛の冠を戴き、錫杖を持つ。そして牛の口取り縄を引いている。土星の後ろにいるのは、婦人の姿で、白い練衣を纏い、鳥の冠を戴き、琵琶を弾いている金星である。

最後の火星は外道の姿で、驢馬の冠を戴き、四本の手にそれぞれ武器を持っている。左側の前にある手には剣、後ろの手には矢を持ち、右側の前にある手には三叉戟、そしてその後ろの手には弓を持っている。

また、宋時代の蘇洵は『嘉祐集』「呉道子画五星贊」⁽⁹⁾に、唐の呉道子が描いた五星図の様子を記録した。以下、該当箇所を引用する。

堂堂五行、道子所摹。歳星居前、不武不挑。求之古人、其有帝堯。

盛服佩劍、其容昭昭。熒惑惟南、左弓右刀。赫烈奮怒、木石焚焦。震但下土、莫敢有驕。崔崔土星、瘦而長腰。四方遠遊、去如飛颺。倏忽万里、遠莫可招。太白惟將、宜其壯夫。今惟婦人、長裾飄飄。抱撫四弦、如声嘈嘈。辰星北方、不麗不妖。執筆与紙、凝然不囂。粧非今人、唇傳黑膏。

この記述からは、木星は前にあり、帝王風の容姿で手に剣を持つ。火星は南にあり、左手に弓、右手に刀を持つ忿怒形である。土星は瘦身で腰が長い。金星は婦人の姿で手に四弦琵琶を抱く。水星は北に位置し、筆と紙を手を持つことがわかる。

以上の記述は、大英本にある五星と完全に一致はしないが、類似する特徴が多い。大英本の五星の容姿は確かに唐時代の都に流行した五星図と近似していることが窺える。

そして、大英本と明らかに同じ底本から描かれた作例として、フランス国立図書館所蔵の「熾盛光仏及び諸星曜図」(図3)(以下、フランス本とする)が挙げられる。

(二) 大足像について

次に、「金輪熾盛光仏及び九曜像」について、基本情報をまとめる。大足像は前蜀・乾徳四年(九二二)の銘文を持つ仏龕石刻であり、現存作例において、年紀を持つ最も古い「正面式」の造像である。⁽¹⁰⁾

主尊は通肩に袈裟を纏い、蓮華座の上に結跏趺坐している。背後

に体ごと包む大きな光背があり、両手は腹の前で定印を結び、掌には金輪が載せられている。主尊を囲んでいる眷属の部分の欠損が見受けられ、現在、像容の明らかなものは右側の五体と左側の二体のみである。銘文によると、眷属の数は元々九体である。また、仏龕の上半部に位置し、宝珠を持つ二体の像は日曜・月曜とされている。そして、主尊の右側の一番下に位置し、両足を大きく広げて立つ男子像は計都と羅睺と推測される。計都と羅睺の上には、主尊奥側に琵琶を持つ金星が、その隣りに筆と紙を持つ水星が配されている。このことから、ほかの星宿神の損傷が激しいため、具体的な尊名は判断できないが、土星と火星であると考えられる。

また、宋初までに制作された熾盛光仏図において、大足像の主尊は唯一、通肩に袈裟を纏う熾盛光仏である。大足像の主尊の印相と持物が大英本と明らかに異なることに對して、五星のうち、保存状態が良い金星と水星が大英本と同じ特徴があることは確認できる。

(三) 奈良・上之坊所蔵『熾盛光仏大威徳銷災吉祥陀羅尼經』見返絵(以下、上之坊本と表記する)(図4)

について

上之坊本は、北宋・開宝五年(九七二)開版の刊記を持つ『熾盛光仏大威徳銷災吉祥陀羅尼經』見返絵である。上之坊本の制作地については、谷口耕生氏の指摘により、呉越国の可能性があるとされる¹¹⁾。現存作例から見ると、上之坊本は「巡行式」の熾盛光仏図にお

いて、主尊が牛車に乗りながら正面に向かう唯一の作例である。

主尊は中央正面向きで牛車の上に乗り、左手を腹前に掌を上に向けて置き、右手は胸の前に挙げている。その左右に比丘形の二弟子と神將形の二天王、そして九曜を配している。比丘形の二弟子が主尊の左右に描くことは、熾盛光仏図において他に例がない。

九曜においては、林温氏¹²⁾と蘇佳瑩氏¹³⁾が各星宿神の特徴を分析したが、持物がはつきり描かれていない人物も何人かいるため、全ては判別が難しい。

特徴が明らかな星宿神は以下の通りである。土星は牛の左側で杖を右手に持つ婆羅門形の老人である。火星は土星の反対側にあり、四臂には弓、箭、劍、戟を持つ忿怒形とする。水星は火星の後ろで筆を右手に持つ女性像に表される。金星は水星と対応する女性像である。牛車の左にある、帝王風の冠を被る人物は日曜で、その冠には日珠だと考えられる宝珠がある。牛車の右にある、手に月珠と思われる宝珠を持つ女性像は月曜である。水星の右後と金星の左後にある二人の半裸の忿怒像は羅睺と計都と考えられるが、その持物と頭冠が区別つけられていないため、特定できない。

そして、土星の後ろにある頭冠の下に長い頭巾を被り、手に笏を持つ男性像と、月曜の後ろにある冠を被る男性と、もう一人の人物は木星、紫氣と月孛だと推測されるが、持物がはつきりと見えていないため、尊格を特定し難い。

後世の熾盛光仏図を参考にすると、木星と紫氣は常に近似した官人風の容姿で表すことがわかる。さらに、木星は画面の前半に位置

するのが一般的であるため、本図において、土星の後ろにある男性像は木星の可能性が高い。月曜の後ろにある冠を被る男性は紫氣で、月曜の後ろにあるもう一人の人物は月孛であろう。

上之坊本にある土星そして火星、水星は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所所蔵の『大威徳熾盛光消災吉祥陀羅尼經』の版画（図5）（以下、ロシア本とする）に描かれている人物と強い近似性が見られる。¹⁴特に、土星の足のしぐさと左手を胸まで挙げる動作が一致している。そして、火星を左右反転してみると、両者が弓、箭、劍、戟などの持物を持つ手は高さから角度まで同じである。そして、水星はロシア本の水星のように猿の冠を被っておらず、その背筋を伸ばした体の動きと衣服の様式は同じである。木星と金星については、ロシア本の欠損が激しいため比べることができないが、この三つの星宿神の近似から、上之坊本にある五星の像容は中国の江南地域にある呉越国から西北の敦煌までの広範囲に流布していたことが窺える。

主尊と各星宿神は円形の雲氣に囲まれ、画面の第一層となり、この十二宮が描かれた雲氣の円形は画面の第二層になる。雲氣の一番上に描かれたのは獅子宮の円相で、右から時計回りに、蟹宮、男女宮、牛宮、羊宮、双魚宮、宝瓶宮、摩竭宮、弓宮、天秤宮、蠍宮、女宮が順に描かれている。蘇氏の指摘によると、蠍宮と天秤宮の順番が逆であること以外は、十二宮の配置は『大聖妙吉祥菩薩說除災教令法輪』の記述とほぼ一致する。¹⁵十二宮を囲む雲氣の外側は放射状に伸びる光線、あるいは雲氣の合間に二十八宿を表す人物と星が

描かれている。これは『文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶日善惡宿曜經』¹⁶（以下、『宿曜經』とする）を基にした配置であると指摘されている。この二十八宿は各星宿神の特徴が描かれており、特定できない星宿神が少なく、現存作例の中に二十八宿の個性を表れた珍しい例である。二十八宿の容姿は、大阪市立美術館所蔵の「五星二十八宿図」にあるそれと近似していることから、これらは唐時代に流行した二十八宿の図様に沿うものだと考えられる。

（四）蘇州博物館所蔵『大隨求陀羅尼經呪』版画（以下、蘇州本とする）（図6）について

最後に、蘇州博物館所蔵の『大隨求陀羅尼經呪』版画を見てみよう、蘇州本は江蘇省蘇州市の瑞光寺塔真珠舍利宝幢經幢の中から発見されたものであり、紙本墨色の版画である。¹⁷梵語の陀羅尼經呪の中央に位置する長方形の枠内に熾盛光仏と九曜、そして十二宮が描かれている。大英本とフランス本と同じく、熾盛光仏は牛車の上に結跏趺坐をして、頭上には宝蓋が懸けられている。その画面中の線が交錯していることから、熾盛光仏の手印ははっきり認識できないが、画面に金輪が描かれていないことが分かる。熾盛光仏の右側にあるのは火星で、その髪の毛は立ち、四臂に武器を持っている。火星の前にあるのは、果物を載せた盆を両手で持つ木星である。木星の右側に立つ外道形の人物は、右手に武器を持ち、頭の上に蛇頭の冠を被っていることから、計都と考えられる。画面の一番下に、牛

を引いているのは土星である。土星の肩には豹皮を纏っており、手に錫杖を持つ。そして画面の右側に計都と対応の位置にあるのは羅睺星だと考えられ、その手には剣を持っている。羅睺星の後ろに両手で日珠を持つ男性は日曜で、画面の右上に両手で月珠を持つ女性
は月曜である。日曜と月曜の間にある二人の女性の星宿神は金星と水星だと思われる。ただし、その持物と頭冠がはっきりと確認できないため、区別はできない。

土星、計都、羅睺の姿は、後の西夏の時代に制作された熾盛光仏図にあるそれと一致している¹⁸⁾。フランス本にある顔のみの四余星の姿と較べると、より、図様が発展していたことがわかる。西夏に流行した四余星と土星の図様はこの時期から既に成立し始めたことが窺える。

この中にある木・火・土・日・月などの星宿神の特徴は『七曜攘災決』巻二に描かれた星宿神の形態に属している。また、画面の上部にある四つの円形は、左から右へ、天秤宮、獅子宮、宝瓶宮、双鱼宮が順次に描かれている。画面の左側の上から下へは、巨蟹宮、双子宮、天蝎宮、白羊宮の順で、画面の右側の上から下へは、弓宮、牛宮、女宮、磨羯宮の順である。陀羅尼經の両側には各十四名の區別が付けられない星宿神があり、二十八宿と考えられる。梵語の陀羅尼經の下には漢字で書かれた唐・不空訳の『普遍光明清淨熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼經』がある。また、発願文の最後には宋初の景德二年（一〇〇五）の年紀があり、漢字經文の両側には守護神が一名ずつ描かれている。

上之坊本と蘇州本を比較すると、同じ画題ではあるが、画面に描かれているモチーフの相異点が多い。まず、画面にある主尊と星宿神の向きが、上之坊本は真正面、蘇州本は画面の右方向を向いている。次に、上之坊本の二十八宿と異なり、蘇州本の二十八宿の姿は個体の区別が付かない。また、蘇州本の二十八宿と中央にある主尊・九曜・十二宮の間には呪文が書かれていて、上之坊本にはそれがない。さらに、最も根本的な違いは、上之坊本の構図は円形で、蘇州本は方形という点である。

上之坊本と蘇州本には多くの相違点が指摘できるが、画面の細部には幾つかの共通点もある。まずは、画面の配置である。中心部の絵だけを見ると、蘇州本の画面配置は上之坊本と同じく三層で構成される。中央は主尊の熾盛光仏を取り巻く九曜星（十一曜）、そして十二宮、一番外側に二十八宿が配置されている。また、蘇州本の画面の一番下に書かれた発願文には「書写此陀羅尼安于幢利能息一切悪」がある。その意味は「この陀羅尼經を書いて宝幢に安置すれば、一切の悪を治めることができる」と理解される。蘇州本が瑞光寺塔真珠舍利宝幢から発見されたことから、これは写経を奉納するために制作されたものであることが伺える。つまり内中外の三層構成の熾盛光仏図の底本に陀羅尼經を差し込んだ可能性が高いだろう。

両図のなかで、十二宮の描き方は、上之坊本の弓宮にある弓と矢が交差し、蘇州本では平行に描かれたこと以外は、多くの類似点が認められる。各宮の様子は『宿曜經』に書かれた十二宮と対応して

いる。蘇州本の発願文の左右にも二人の天王が描かれている。上之坊本では主尊の左右に配置されることは異なるが、手に剣を持つこと、円形の頭光が付くこと、そして頭巾を巻く点は完全に一致している。また、宋までの現存作例を見ると、天王が描かれたのはこの二つの作例のみである。

さらに、主尊の熾盛光仏を見ると、二重蓮華台の上に結跏趺坐している如来形の主尊、主尊の上に懸けられている幔幕が垂れ下がる天蓋、牛車の後ろの左右にある旌旗、また、車を引く牛の頭に描かれた同心円の紋様まで共通している。

この二つの作例に見られる近似性は、両者が同じ図像源泉から発展された異なる表現であることを推察させる。

蘇州本の制作年代は上之坊本より五十年近く遅いが、五代において蘇州は呉越国の一部分である。景德二年に呉越国が宋に臣服し、国としての呉越国が存在しなくなったが、戦乱がなかったため、その文化の伝承は絶えていないと考えられる。蘇州本と上之坊本に見られる近似性により、谷口氏の指摘するように、上之坊本が呉越国で制作された可能性は高いだろう。

以上、唐末から宋初までに制作された紀年銘を持つ熾盛光仏図の基本情報を確認した。熾盛光仏を取り巻く諸星宿神たちの図様の発展と複雑化になる状況は、すでに諸先学によって詳しく論述されているが、主尊の熾盛光仏に関する研究はまだ少ない¹⁹⁾。

前述の作例を比較すると、大英本とフランス本にある主尊、大足

像の主尊、そして上之坊本と蘇州本にある主尊はきわだっていることが注目される。大英本とフランス本の天蓋は上之坊本と蘇州本のそれと違い、敦煌によく見られる様式である。蓮華台は後者の二重蓮華台ではなく、一重の蓮華である。最も明らかな違いは、主尊の前の香案の有無である。宋初まで、このような香案が描かれた熾盛光仏は大英本とフランス本のみである。

星宿神においては、前述の通り、五星と日、月などの星宿神の形象は『七曜攘災決』『梵天火羅九曜』に書かれた伝統的な姿に沿う。十二宮と二十八宿は『宿曜経』に詳しく書かれている。また、画史の記録により、梁から初唐まで、「五星像」「九曜像」「鎮星像」「房宿像」「五星二十八宿真形図」など星宿神を画題として描かれた図像が数多く制作された²⁰⁾。そして、記録にある最も古い熾盛光仏図は唐代の呉道子が描いた「熾盛光仏像」である。熾盛光仏図が成立した時に、九曜・十二宮・二十八宿などの星宿神の図様は既に成熟していたことが推測できる。よって、これらの作例の制作地が異なり、制作時代が異なるとしても、五星や十二宮の表現はほぼ変化していないことになる。さらに、五星図様の発展状況を参照すると、呉道子の時代から大英本が制作された八九七年までに百年が経っており、この長い時間の中で、熾盛光仏の像容は星宿神のように固定的な図様になると考えられるが、前述の通り、実際はそうではない。主尊の持物、印相、それを取り巻くモチーフに統一性がないということが問題なのである。

經典において熾盛光仏の像容に触れる描写は唐・戸羅跋陀羅訳『大

聖妙吉祥菩薩說除災教令法輪』のみである。この經典に拠れば、熾盛光仏に関する描写は以下の通りとなる。

熾盛仏相儀、毛孔飛光散、首冠五仏相、二手如釈迦。

つまり、熾盛光仏は毛穴から光を飛ばし、五仏相の冠を戴き、両手は釈迦と同じ姿で書かれている。

画面自体から見ると、大英本とフランス本にある熾盛光仏の姿は、敦煌地域で盛んに制作された説法図にある釈迦如来像と近似性が強いことがわかる。

例えば、「祇樹給孤独園図」(図7)は唐の咸通九年(八六八)、大英本が制作される二十九年前に刊行された版画であり、出土場所は大英本と同じく敦煌莫高窟藏経洞である。「祇樹給孤独園図」をはじめ、敦煌周辺に大量に制作された説法図の版画に描かれた主尊と主尊の前に置かれた香案²¹⁾、そして天蓋は大英本とフランス本のそれとの近似性が極めて高いと言える。敦煌において、熾盛光仏図を制作する当初、熾盛光仏の底本がなかった可能性があると考えられる。そのため、絵師が經典儀軌に書かれた熾盛光仏は釈迦の形象と同じであることから、当時流行した説法をする釈迦の様子を参考に、熾盛光仏を描いた可能性は否定できない。

五星などの星宿神図様の発展は安定し、はっきりした根拠があるのに対し、主尊の熾盛光仏が他の図像から直接的に図様を借用することには、大きな違和感を感じる。

筆者はこの違和感について、密教修法の一つである熾盛光法は秘密の修法ゆえに生じるものだと考えている。熾盛光仏に関する經典の記載には、以下のような記述が見られる。

『仏說熾盛光大威德消災吉祥陀羅尼經』唐・不空訳

但于清淨処置立道場。

我今說此陀羅尼不可思議功德無比。秘密受持勿妄宣伝。

『仏說大威德金輪仏頂熾盛光如来消除一切災難陀羅尼經』唐・訳者不明

応于清淨処置立道場。

我說此真言不可思議功德無比。秘密受持勿妄宣伝。

『大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經』唐・達磨栖那訳

我今更為汝說秘密一字心真言、汝当善聴。

『大聖妙吉祥菩薩說除災教令法輪』唐・尸羅跋陀羅訳

必須慎靜隱密作之、深心敬奉志求必獲応効。

嚴飾一淨房深密之處、建曼荼羅、勿使多人知見、若多人知見即求願難得災禍不除。

以上、唐時代の經典儀軌に見られるように、これらの経軌は、熾盛光道場は秘密のものであることをより強調している。

蘇氏の研究により、熾盛光法が日本に伝来した後、秘密に修法を行うことも大切に守られてきた。²²⁾『阿婆縛抄』には「帖決云。熾盛光修之時。不懸彼曼陀羅。祕故也。故大師曼荼羅納藏不出給也。或

一忿怒尊懸之修之。謂不働尊也」と記録されている。⁽²³⁾つまり、熾盛光法を修法する時に、熾盛光仏の曼荼羅の代わりに不動尊図を掛けることで、熾盛光仏の秘密性を守るのである。このことは不空訳の『仏説熾盛光大威徳消災吉祥陀羅尼經』に書かれた「于一忿怒尊像前」という熾盛光道場に忿怒尊像を安置することにも対応している。

また、谷口氏の指摘により熾盛光法は、唐において、皇帝の本命を祈念して国家を守護する皇帝の本命道場である。⁽²⁴⁾熾盛光法は唐時代において、皇室のためにある修法であり、秘密性を極めて重視する道場で、そこで成立した熾盛光仏図が唐において一般に公開されることがないと考えられる。

一方、熾盛光仏図が制作される前に、既に成立した星宿神の図様は、秘密修法に用いるものではないため、早い段階で民間に流布されたと考えられる。それに対し、唐においては、制作された熾盛光仏図は公開されていない。民間で制作された熾盛光仏の様子にはばらつきがあつて、統一性や完成度も低い。

よつて、敦煌で制作された「熾盛光仏並五星図」には頭冠・持物・性別ないし服色までが明確な個性を持つ五星と、他の図像から図様を借用した主尊と一緒に配置されたことも理解できるだろう。

まとめ

以上、唐末から宋初までに制作された紀年銘を持つ四幅の熾盛光仏図に焦点を当て考察を行った。その画面分析によつて、星宿神の

図様の完成度と、熾盛光仏の図様のそれは同調しないということ、また、他の仏から図様を借用して熾盛光仏の図像を仕上げることが確認できた。

その上で、史実と經典儀軌の記述から、熾盛光法に用いられる熾盛光仏図が唐時代において秘密のものであることがいえる。従つて、皇室のために制作された熾盛光仏図はその時代、民間には流布しなかった。地方の絵師が熾盛光仏図を制作する時に参照できる熾盛光仏図がなかったため、「二手は釈迦の如く」という經典儀軌にある描写をもとに、釈迦の図様を借用する他なかったという可能性を指摘した。

今後は本稿の分析をもとに、宋から元、また西夏時代に制作された熾盛光仏図に関し、更なる検討を行いたい。

註

- (1) 唐・不空訳『仏説熾盛光大威徳消災吉祥陀羅尼經』『大正藏』第一九卷、三三七頁b—三三八頁a。
- (2) 唐訳者不明『仏説大威徳金輪仏頂熾盛光如来消除一切災難陀羅尼經』『大正藏』第一九卷、三三八頁b—三三九頁a。
- (3) 唐・達磨栖那訳『大妙金剛大甘露軍拏利焰鬘熾盛佛頂經』『大正藏』第一九卷、三三九頁a—三四二頁b。
- (4) 唐・羅跋陀羅訳『大聖妙吉祥菩薩説除災救令法輪』『大正藏』第一九卷、三四二頁b—三四七頁b。
- (5) 孟嗣徽「熾盛光仏变相図図像研究」(『敦煌吐魯番研究』第二卷、北京大學出版社、一九九六年)。

- (6) ウィット・フィールド編、上野アキ訳『西域美術 敦煌絵画一』（大英博物館スタイン・コレクション）（講談社、一九八二年）。
- (7) 唐・金俱吒『七曜撰災決』『大正藏』第二一卷、四二六頁b―四五二頁b。
- (8) 唐・一行修述『梵天火羅九曜』『大正藏』第二一卷、四五九頁b―四六二頁c。
- (9) 宋・蘇洵、『嘉祐集・雜文二十一首・吳道子画五星贊』（文淵閣四庫全書）卷一五、上海古籍出版社、一九九七年。
- (10) 「敬□發心掘造大威德熾盛光仏併九曜共一龕右弟子□□□□与□□□□兄弟等□造上件功德併已成就意者□□□□同範□□陳雷□陪□法百年相守次乞家人□□□□偶随永無障堤時以乾德四年十二月十六日修齋表慶□敬弟子温孟達寔忠進于彦章梁陳季□鄧知進楊宗厚寔□芝程彦暉王孟言王德全陳□敬造（重慶・大足石刻藝術博物館、重慶社科院大足石刻藝術研究所編）大足石刻銘文録」重慶出版社、一九九九年。
- (11) 谷口耕生「五代・北宋期における熾盛光道場本尊圖像の形成と伝播―温州白象塔星宿神塑像をめぐる」（『アジア仏教美術論集 東アジア3（五代・北宋・遼・西夏）』中央公論美術出版、二〇二一年）。
- (12) 林温「上之坊藏『熾盛光大威德銷災吉祥陀羅尼經』見返繪熾盛光曼荼羅について」（『奈良県所在中国古版経調査報告書』奈良県教育委員会、二〇〇一年）。
- (13) 蘇佳瑩「日本における熾盛光仏圖像の考察」（『美術史論集』第一一〇号、神戸大学美術史研究会、二〇一一年）。
- (14) 廖陽「大威德熾盛光如来吉祥陀羅尼經文本研究」（『敦煌研究』第四号、甘肅人民出版社、二〇一五年）。
- (15) 註13を参照する。
- (16) 唐・不空訳『文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經』『大正藏』第二一卷、三九四頁c。
- (17) 蘇州市文管会「蘇州市瑞光寺塔發現一批五代、北宋文物」（『文物』第

- 一〇号、文物出版社、一九七九年）。
- (18) エルミタージュ美術館編『俄藏黑水城芸術品』第2冊（上海古籍出版社、二〇一二年）。
- (19) 岩原諱信『星と曆と真言密教』（高野山出版社、一九五八年）。武田和昭『星曼荼羅の研究』（法藏館、一九九五年）。孟嗣徽「熾盛光仏交相図圖像研究」（『敦煌吐魯番研究』第二卷、北京大学出版社、一九九六年）。『盛唐名絵五星及二十八宿神形図』（『宋元絵画研究』慶賀薄松年教授從教60周年）北京故宫出版社、二〇一五年）。
- (20) 宋・宣和画譜』卷一（『画史叢書』第二卷、上海人民美術出版社、一九六三年）。
- (21) 宿白『唐宋時期的彫版印刷』（文物出版社、一九九九年）。
- (22) 註13を参照する。
- (23) 『阿婆縛抄』五八、『大正藏』圖像部第九卷、二四頁。
- (24) 註11を参照する。

【図版出典】

- 図1…ウィット・フィールド編、上野アキ訳『西域美術 敦煌絵画一』（大英博物館スタイン・コレクション）講談社、一九八二年。
- 図2…林樹中編『海外蔵中国歴代名画』第二卷、湖南美術出版社、一九九八年。
- 図3、4、5、8、9、10…李之檀編『中国版画全集』第一卷、紫禁城出版社、二〇〇八年。
- 図6…常任俠編『大足石刻彫塑全集』北山石窟卷、重慶出版社、一九九九年。
- 図7、11…周心慧編『中国古代仏教版画集』第一卷、学苑出版社、一九九八年。

施園園（し・えんえん）

二〇一八年 中国美術学院学部卒業

二〇二一年 神戸大学大学院人文科学研究科博士課程前期課程修了

二〇二三年ゝ 神戸大学大学院人文科学研究科博士課程後期課程在籍

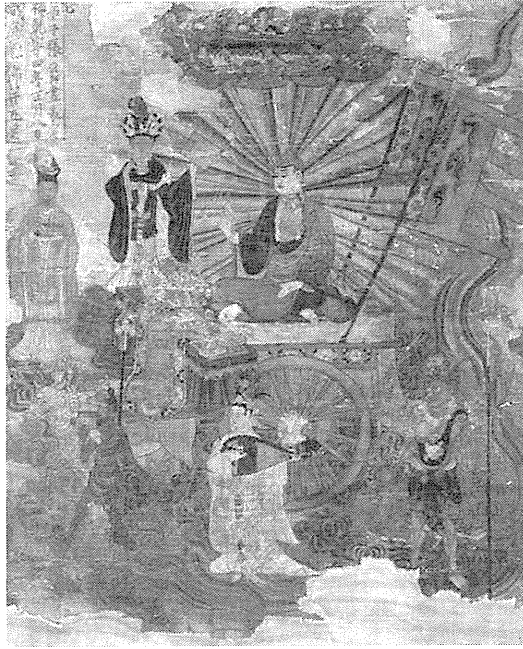


図1 「熾盛光仏並び五星図」唐・乾寧四年（八九七）
絹本着色、（縦 80.4、横 55.4 センチ）莫高窟蔵
経洞出土、大英博物館所蔵



図3 「熾盛光仏及び諸星曜図」晚唐、紙本
着色、（縦 76.4、横 30.5 センチ）莫
高窟蔵経洞出土、フランス国立図書
館所蔵

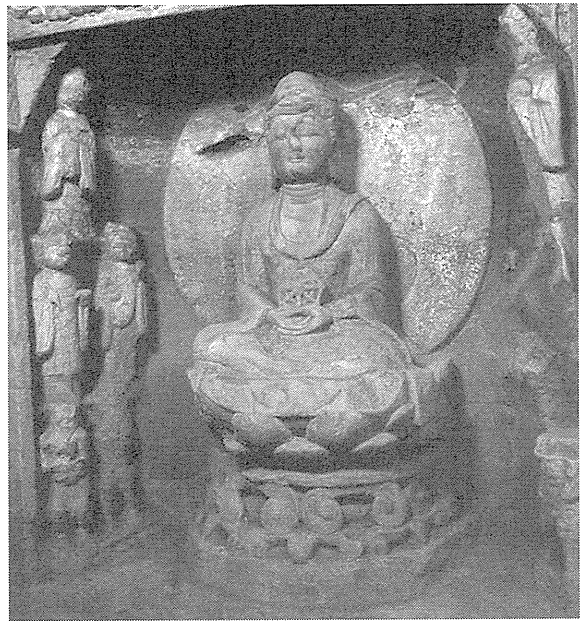


図2 「金輪熾盛光仏及び九曜像」前蜀乾德四年（九二二）
重慶大足石刻北山仏湾の第三十九窟



図5 『大威德熾盛光消災吉祥陀羅尼經』
版画、五代、紙本墨印、(残幅：
縦 32.1、横 22.8 センチ) ロシア
科学アカデミー東洋学研究所サン
クト・ペテルブルク支部所蔵

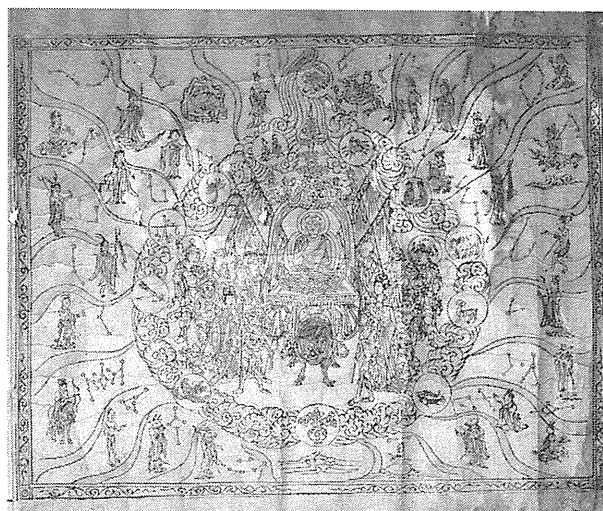


図4 『熾盛光仏大威德銷災吉祥陀羅尼經』見返絵、宋・開宝五
年(九七二)紙本墨印、(縦 28.2、横 142.8 センチ) 奈良・
上之坊所蔵



図7 『祇樹給孤獨園圖』唐・咸通九年(八六八)紙本墨印、
敦煌莫高窟藏經洞出土、イギリス国立図書館所蔵



図6 『大随求陀羅尼經呪』版画、宋・景德
二年(一〇〇五)紙本墨印、(外縦
25、横 21.2 センチ、内縦 8.5、横 6.2
センチ) 蘇州博物館所蔵